

C A I R O

1

ラマダーンのカジノへ



いよいよ世界カジノ紀行「カッシーノ！」の再開である。

自分でいうのも何だが、年間自殺者が三万人を数える大不況の中で、世の譏りを物ともせずこの企画を遂行する私と、同行のスタッフはただものではない。しかも掲載誌は、日本経済を真剣に憂うる、天下の週刊ダイヤモンドだから二度驚く。

善良なる読者諸兄に、まずはお断りをおかねばなるまい。本稿を起こすにあたっての、私の真意である。

われわれ日本人は、労働を美德とし、遊びを罪惡と決めつけて今日の国家を造り上げた。いつの世にも親や教師が言っていた「よく遊び、よく学べ」は空疎なお題目で、実は誰しもが「よく学び、よく働け」と自らを鞭むちつて生きてきた。その結果、幸福を希求しつつ幸福の所在を確認できずに一生をおえるという、きわめて不幸な国民像を現出せしめた。

アイデンティティが「労働」であるから、職を奪われれば死ぬのである。死なぬまでも、倒産や失業や左遷や仕事上のミスが、おのれの存在意義をたちまち殆あやうくしてしまうのである。

年間自殺者三万人の根源的原因を日本人は知らぬが、その国民性を客観的に見知っている外国人の識者は、正確に理解しているであろう。われわれはいまだに、明治の富国強兵策たに崇たられており、その結果としての戦と敗北の記憶に、今も世代を超えて縛ためられている。

富国強兵の結果の敗戦亡国と、高度成長の結果の不況亡国はほとんど同じで、要するにわれわ



オールドカイロのスーク（市場）にて。



れば、どのような構造的改革にも増して、明治以来の意識改革をなさねば、おそらくこの先も形
のちがう同じような失敗をくり返し続けるであろうと思われる。

この現実を違う角度から眺めると、われわれは学ぶべきことをアメリカから学ばず、学ぶべき
でないことばかりを学び続けてきた、とも言えるであろう。

アメリカの国民生活では、労働が美德であると同時に、労働の対価としての遊びも美德である。
むろんこの点はアメリカに限らずヨーロッパの先進国でも同様で、もしこの世界常識に異を唱え
るとすれば、古くさい共産主義か、戒律でがんじがらめの宗教国家のほかにはあるまい。

私は「よく学び、よく遊べ」の訓^{おし}えを、まさかお題目だとは思わずに、そのまま素直に実行し
て成長した。ために当然のごとく社会ではドロップアウトしてしまっただが、幸い芸が身を助
けるかたちで、小説家になることができた。

労働の正当な対価が、賃金ばかりであるはずはない。労働に見合うだけの遊びをせねば、人間
は幸福の所在を死ぬまで確認することができない。個々の差こそあれ、ひとりひとりが把握する
そうした幸福の実感の集合が、文化国家の実力である。

ところが、若い世代の人々はあんがい遊び上手で、それぞれが幸福の確認をきちんとしている。
今の若者がそうなのか、いつの時代でもそういうものなのかは問題となるところであるが、いず
れにせよ未来のためには、遊び下手なわれらオヤジ世代が自ら意識改革をなす必要があると私

紀元前2560年に建てられたクフ王の
ピラミッド、クフ王の息子カフラー
王のピラミッド（手前）を背に。



は思った。

かくかくしかじか、明治以来百三十有余年の大計を語ればきりはないが、こうして私は、私財をことごとく日本才ヤジのために投ずる「カッシーノ！」の旅を思い立ったのであった。

さて、たまに小説を書いたりするギャンブラーの私と、ときどき芸術写真を撮ったりするギャンブラーの久保吉輝カメラマンのコンビは、かねてより世界の鉄火場を荒らし回る仲である。

この二人に加えて、たまに出版物を作ったりするギャンブラーの彦蔵、ときどきふつうの旅行者を外国にエスコートしたりするギャンブラーの武内、合計年齢百八十歳が今回のクルーと決まった。

目的地はアフリカである。ここを後回しにすると体力的な問題が生じそうなので、先に片付けておこうということになった。私は高コレステロールの上に不整脈があり、久保はアルコル性の脂肪肝であり、彦蔵は糖尿病性の視野狭窄まよゆうまに悩み、武内は過労性神経症である。アフリカの過酷な風土をめざすには今が限界と思えた。

エジプトのカイロに入り、イスラム圏で独自の発達をしたカジノを巡る。次に紅海沿岸の高級保養地、シャルム・リゾートを経て、ケニアのナイロビへ。そして南アフリカのヨハネスブルク、サン・シテイ、ケープタウンと、アフリカ大陸のカジノを北から南に縦断する気宇壮大なるギャ

ンブル・ツアーである。

十三日間の行程中、四泊が機内という強行軍に加えて、イラクと中東の情勢は緊迫このうえない二〇〇二年十一月中旬、各出版社からは思いとどまれとのファックスや電話が殺到したが、「俺の命は俺が使う」と言い残して成田を立った。

エジプト航空カイロ行きの便は、なんとマニラとバンコクを経由する二十時間のフライトであった。

現在では週一便の直行便で十三時間、関空からは週二便が飛んでいるのだが、私のスケジュールに合わせると、この二十時間の地獄旅しかなかったのである。

しかしエジプト航空はなかなかである。まず、タバコが喫^ずえる。イスラムの戒律により酒を積んでいないから、まさかタバコまでだめだとは言えないのであろう。下^げ戸でヘビースモーカーの私にとっては、願ってもない条件である。ただし、酒類の持ち込みは自由なので、行きがけの免税店で買ってきた酒を飲む分には何の問題もない。

機内のBGMはイスラムの民族音楽である。フライトが近付くと、敬虔なムスリムの乗客や乗務員たちまでが、旅の無事を祈ってコーランを読み始める。ファースト・クラスの食事はコースではなく、何台ものワゴンで次々とごちそうが運ばれ、好き勝手に選ぶことができる。いかにも

ところで、

イスラムの戒律はいったい

どうなっているのでしょうか。

酒と女とバクチはご法度のはずである。





ナイル川の中洲、ゲジラ島に建つエレガントホテル、カイロ・マリオットホテルからナイル川を眺める。

客への饗応を大切に、イスラムのお国柄である。

早朝六時前、カイロに到着。イメージとしては灼熱の砂漠都市であるが、気温は日本とほぼ同じで、革のジャケットだけでは心細いほどであった。

もうひとつ意外なことには、あんがい湿気がある。これも母なるナイルの恵みのうちであろうか、同じ砂漠地帯でもラスベガスとはまったく違う湿り気があつて、鼻や咽のどを痛めることはない。宿はナイル河畔のマリオットである。何でも、一八六九年のスエズ運河開通を祝つて建てられた宮殿をホテルに改築した代物だそうで、なるほどクラシックな建物といい広いガーデン・スペースといい、まことに申し分ない。印象としては、ホノルルのロイヤル・ハワイアンを何倍かにスケール・アップした感じである。

私は宿を選ぶときには、必ず開業年を訊たずねるようにしている。旅行社の言うことやガイドブックの記載はあてにならない。唯一、ある程度信用の置ける条件は、暖簾のれんの伝統である。ホテルのホスピタリティは何代にもわたつて蓄積されるものなので、多少設備が古くても伝統あるホテルはそれなりに居心地がいい。要すればリニューアルを施されたクラシック・ホテルが理想である。この原則は日本の温泉旅館にもそのままあてはまる。

このマリオットには、カイロ随一といわれるカジノがある。